

平成28年度学校自己評価(最終評価)

<p>中長期ビジョン (学校ビジョン)</p>	<p>「一人ひとりの生徒を大切に」を教育の根幹におき、勤労と責任を重んじ、心身ともに健康で地域産業及び社会の発展に貢献できる人を育てる。</p>	<p>本年度 重点目標</p>	<p>(1)学習指導の充実～授業実践および県版SPHの取り組みをととして「学びの質」をあげ、生徒の学力の向上を目指す～ (2)生徒指導の充実～規範意識の醸成と清々しい教育環境の整備を図る～ (3)生徒支援の充実～3年間を見通した生徒支援を行い、生徒一人ひとりの進路実現を図る～ (4)地域連携の充実～地域の教育資源を活かし、本校の教育資源を地域に活かす～</p>
-----------------------------	--	---------------------	---

平成28年度当初					評価結果 2月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評価	担当	改善方策	備考
1 学習指導の充実	○協同学習の理念を基盤とした「学びあい」のある授業やICTを活用した授業の取り組みを組織的にを行い、学習意欲を喚起することで、総合的な学力の向上をめざす。	○「学びあい」を取り入れた授業実践は教職員一人あたり年2回程度取り組んでいる。今後もICT活用等の授業研究を継続し授業改革を推進していくとともに、本校生徒の学力向上につながる学習方法の検討・実践が重要である。	○生徒同士の学びあいを授業の中核に据え、生徒同士が適切な主題のもとで学びあうことにより、主体的に意欲を持って様々な学習課題に取り組む。 ○ICT機器を学習ツールとして活用し、生徒が自ら思考し、判断する力を養い、あわせてコミュニケーション能力を高める授業を実践する。 ○基幹科目である「地域基礎」の充実を図る。	○授業研究会、授業実践報告会をととして教員相互に研修し、生徒の学習意欲を高める授業立案を行うとともに、生徒の「学びあい」を観察し、自らの実践を振り返り改善に繋げる。 ○生徒各自の特性や対人関係に配慮した「学びあい」をととして、本校にあった学習を模索し授業の改革を進める。 ○学習意欲を高め、「学び合い」の活動を促すためのICT機器の活用方法を検討し、授業実践をする中で検証を進める。	B	校務マネジメント	○研修会等を通して日々授業改善とその実践に努めている。実践報告会を通して、お互いのスキル等、課題を情報共有できた。「学びあい」を取り入れた授業展開もなされている。 ○授業に関する情報交換、意見交換が活発であり、授業改革につながる取組にしたい。 ○本年度新設の「地域基礎」では、毎週、担当者会議を持ち、その内容の充実に努めている。引き続き、担当者会を持つなどして丁寧な対応を心掛け、来年度以降も科を超えた連携を密にする必要がある。	
	○「学び直し」に関する研究実践を行い、学校設定科目「マルチベーシック(総合的な基礎学習科目)」や国語・数学・英語の「基礎科目」による基礎学力の向上をめざす。	○「学び直し」に係る教職員研修会を年間をととして実施するなど、学校全体が授業改善に取り組んでいる。生徒はマルチベーシックで理解度や意欲が徐々に増しているが、基礎学力の定着が十分でなく、今後も「学び直し」の研究が必要である。	○今年度から実施の国語・数学・英語の「基礎科目」において、研修会や研究授業を行い、ICT機器を活用した学び直し指導の充実を図る。 ○生徒が主体的にマルチベーシックに取り組むことで、学習内容の理解と学力の定着・向上につなげる。	○「学び直し」に向けたICT機器の充実、再整備を行い、有効活用のための授業改善や指導力向上等に努める。 ○アプリケーションに自作作成問題を投入し、生徒の理解に応じた活用を実践する。 ○基礎科目、マルチベーシックⅡ・Ⅲを円滑に運営し、基礎学力の定着、向上に取り組む。	B	校務マネジメント	○国・数・英の3教科とも、試行錯誤を繰り返しながら、学習意欲の喚起、知識の定着等を図っている。特に1年生では、意欲の向上が顕著に見られた。今後も、よりよい授業展開および実践を目指すための学習指導について検討を続け、さらなる向上を図りたい。 ○タブレットの活用について、検討を重ねるとともに、学校独自問題について、より一層充実させるための検討を加え、その活用を図る。	
	○専門教育の基礎・基本を徹底し、学習意欲の向上や資格取得に向かう意欲の育成をめざす。	○各種検定・資格取得に多くの生徒が積極的に取り組み、より難易度の高い資格試験にも挑戦している。今年度から実施の「県版SPH」を有効活用し、学校と地域産業の連携を一層密にすることで、専門教育の深化と魅力化を図る。	○より多くの生徒が資格取得にチャレンジする。 ○教科・科目に関連した資格の合格率の向上をめざすとともに、新たな資格に挑戦する生徒を育てる。 ○県版SPHを活用した地域との連携事業に取り組み、専門教科の充実を図る。	○資格取得LHR(年2回)を実施するとともに、各学科、教科と連携して資格取得ノートを活用した取り組みを行う。 ○アグリマイスター顕彰制度等との関連を明確にし、目標設定による取得意欲を促す。 ○各科の教育内容に沿った、新たな資格開拓を目指し検討する。 ○県版SPH校内実施委員会を通じて事業の拡充につなげる。	B	キャリア形成	○アグリマイスターについての周知や資格取得LHRおよび各科の学習指導をととして、資格取得に向けた生徒の意欲を喚起し合格者の増加を図る。 ○県版SPHの事業をより一層充実させる。 ○県版CAPを活用し、担い手の育成を推進する。	
2 生徒指導の充実	○生徒自身に気づきと自律を求める指導を行い、社会人・市民として求められる姿勢の育成をめざす。	○指導対象の生徒数は減少しているが、指導内容は多様化しており、家庭や地域、外部機関と連携した指導体制の構築が必要である。生徒一人ひとりを大切にしたい指導を心がけ、「自己有用感」を実感できる体験活動が重要である。	○「いつでも就職や進学面接を受けられる農林生になろう」の趣旨を理解し、端正な服装・髪型、日頃のあいさつなど自らが行動できる。 ○社会規範や一般常識を理解し、道徳心を持って行動することができる。	○毎朝登校時の立ち番で服装・あいさつ指導を行う。 ○昼休憩の巡回週間を設け、生徒理解を深めながら指導を実施する。 ○授業や集会での集団規律を徹底する。 ○喫煙防止・薬物乱用防止・携帯インターネットのマナー教育を全学年で実施する。 ○Hyper-QU、いじめアンケートを計画的に実施し、問題行動やいじめ・不登校の未然防止に努める。 ○職員・PTAによる通学路交通安全指導・自転車安全指導を実施する。	B	生徒マネジメント	○キャリア教育等の実践を重ねていくことで、生徒の規範意識の醸成を図る。 ○学校内は元より、登下校時に至るまで正しい制服の着こなしができるよう、一層の指導を進めていく。 ○協同学習の理念を生かした教育の中で、他者を思いやる心の育成を図る。 ○Hyper-QU、いじめアンケートの結果等を活用して、生徒の状況把握や生徒理解を進め、いじめ、不登校等の未然防止に努める。	
3 生徒支援の充実	○社会的な自立に向け、3年間を見通したキャリア教育を推進し、早期の進路実現をめざす。	○雇用状況が改善されている中で、適切な進路指導により、昨年度の進路決定率は100%だった。デュアルシステム等の円滑な実施に向けて、校内での協力体制、地元産業との連携が必要とされる。キャリア教育を全教科・全領域でどのように実践するかが課題である。	○キャリア教育全体計画に基づいて、より系統的・段階的に進路指導を実践することで、全員の進路先が早期に決定する。 ○キャリア形成グループが一体化した活動を行うことにより、生徒のキャリア育成を図る。 ○進路情報に基づいて、進路実現に向けて生徒が自主的に動くことができる。	○進路面談や進路補習、面接練習等により進路意識の喚起と早期進路決定を図る。 ○キャリア形成グループ会議を綿密に行うことで、情報共有を図り一体化に取り組む。 ○地元産業界との連携で地元企業説明会・インターンシップ(短期就業体験)・デュアルシステム(長期就業体験)を実施する。また、専門性を活かしたボランティア活動等に取り組み、生徒の職業観や勤労意識の高揚を図る。	B	キャリア形成	○進路先が全員決定するまで、粘り強く個別面談や個別指導を繰り返す。進路先の早期決定と試験に向けた準備を行う。 ○生徒の特性に応じて教職員がきめ細やかな指導を行うことで、生徒一人ひとりのキャリア教育を推進する。 ○3年間を見通したキャリア教育を推進することで、早期退職等の未然防止に取組む。	
	○学校生活の様々な場面で自己理解・他者理解を促し、人間関係づくりを支援することで、「思いやり」のある学校・学級風土の醸成ときめ細やかな生徒の支援をめざす。	○本校生徒の実態把握や教職員研修等により、教職員の特別支援教育への認知・理解は向上している。今後も自己理解・他者理解が十分でない生徒に対しては、きめ細やかな生徒支援を実践し、「思いやり」の心を育てていく。	○教職員一人ひとりが、特別支援教育の観点に沿って「学びあい」を取り入れた「わかる授業」の工夫をする。 ○生徒一人ひとりが居心地のよいクラスの中で落ち着いて学習に取り組む。 ○教職員間で生徒情報を共有し、より適切な支援ができる体制を整える。	○「授業における必須支援項目」に沿って授業をすすめる、わかりやすい授業を展開する。 ○様々な場面を捉え、生徒情報の収集に努め、共有することによって居心地の良いクラス作りをめざす。 ○1年団を中心に「ソーシャルスキルトレーニング」を導入して、生徒の自己理解・他者理解を進める。	B	生徒サポート	○必須支援項目を意識しながら、授業に取り組むことができた。 ○2学期行事に取組む中で、学級満足群も4割近くとなり、増加傾向がみられる。 ○1年団ではソーシャルスキルトレーニングを取り入れた学級活動にも取り組めた。 ○教職員の協力を得ながら、取り組めた。これらの活動を、次年度以降も継続し、経験を積み上げて体系化したものとした。	
4 地域連携の充実	○地域連携を通して、地域の活性化に寄与するとともに、生徒の全人的な発達を促し地域に期待される学校をめざす。	○地域や地元企業と「顔の見える連携」を進めることで、関わった生徒の満足度や達成感が高まるなど、教育的効果が見られている。今後も本校の教育資源と地域の教育資源を活用していくことで、学校と地域の活性化を一層図っていく。本校の活動が地域や中学校に十分理解されていない実状がある。	○生徒が地域連携をととして、各種行事・イベントに参加することで、地域の活性化や生徒自身の意欲喚起を図る。 ○生徒が地域のボランティア活動等に積極的に参加し、自己有用感や達成感を得ることで、社会性やコミュニケーション力を養う。 ○地域や中学校等に広報していくことで、本校教育への幅広い理解を得る。	○地域へ学校の情報を積極的に提供するとともに、地域からの情報を得て、活動の機会を広げていく。 ○授業や実習での活動を通じて地域連携を図り、生徒の学習意欲の喚起を図る。 ○桜土手・智頭駅の清掃等学校全体の活動として継続し、生徒のボランティア意識の向上と地域を愛する意識の高揚を図る。 ○本校教育の取り組みを報道機関を通じ、外部に積極的に情報発信する。	A	キャリア形成	○引き続き、生徒の意欲喚起をはかり、地域と学校の教育資源の相互活用により、本校教育の活性化と生徒の体験活動の充実をすすめるとともに、地域の活性化にも貢献する。 ○学校祭や即売会の在り方について、共同開催している地元「智頭農林業いきいき交流まつり」実行委員会との検討を更に進める。 ○地元住民の方にも地域に開かれた学校として認識されつつあり、今後も地域と共に歩み続ける学校としての取組みを継続していきたい。	